

# 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響

—— 帰属意識の媒介効果における性差および適応感を高める友人関係機能 ——

中村 真\*・松田 英子\*\*

## 要 約

首都圏の4年制大学の学生を対象に質問紙調査を実施し、大学不適応に影響する要因を検討するとともに、その性差の分析を行った。その結果、男女に共通して大学不適応に直接影響する要因は、「授業理解の困難さ」および「大学への愛着（帰属意識）の低さ」であったが、「友人関係満足度」は「大学への愛着」を媒介して大学不適応に負の影響を与えており、間接的な影響をもつことが示された。また、「入学目的の明確さ」については、男子学生において大学不適応に直接的な負の影響を及ぼす一方で、女子学生においては「友人関係満足度」と同様に「大学への愛着」を媒介して大学不適応を抑制する間接的な要因であることが示された。加えて、どのような対人的機能が友人関係満足度を高めているのかを検討したところ、相手との深いかわりや互いを高め合うような関係よりも、安心して気楽につき合えること（男女共通）や、長期間の関係継続が期待できること（男子学生）、困ったときに助け合えること（女子学生）が満足度の高さに影響していることを示唆する結果を得た。これらの結果に基づいて、大学生の大学不適応を予防するための方策について考察を行い、今後の研究の課題を述べた。

## 問題・目的

大学全入時代の到来にともない、大学生の中途退学率は増加傾向にある。その背景には、近年の厳しい経済情勢とともに、心理的要因としての大学生の適応力の低下があると考えられる。松井・中村・田中（2010）は、女子大学生を対象とする調査結果に基づいて、大学不適応に影響する要因が、「友人関係の希薄さ」「授業理解の困難さ」「入学目的の曖昧さ」であることを指摘している。一方、高木（2006）は、大学・アルバイト先・部活動といった組織への帰属意識が大学生の充実感に影響することを明らかにした。これは、大学への帰属意識が、大学不適応に対して抑制的な影響力を持つ要因のひとつである可能性を示唆する。

中村・松田（2013）は、これらをふまえて、大学不適応に影響する要因が大学への帰属意識を媒

介して、大学生生活の満足度を低め、大学不適応傾向を高めているのではないかと考え、これを多重回帰モデルにより探索的に検討した。その結果、大学不適応に直接的かつ最も強く影響するのは授業理解の困難さであった。入学目的の明確さも大学不適応に直接的な負の影響を及ぼしていたが、授業理解の困難さほど影響力は強くなかった。また、友人関係の良好さは、大学不適応に対して直接的には強い影響を及ぼさないが、大学への愛着（帰属意識）を媒介して間接的に大学不適応の低さに影響する傾向が認められた。

本研究では、これらを継続して検討し、性差の分析を行うことによって、大学不適応に直接的・間接的に影響する要因が男女で異なるのかを確認する。また、友人関係におけるどのような対人的機能がその満足度の高さに影響し、大学への帰属意識を介して大学適応に影響するのかを明らかにする。これらを通して、大学不適応を予防するための有効な方策を構築することに貢献し得る基礎的な知見を導く。

2013年11月30日受付

\* 江戸川大学 人間心理学科教授 社会心理学

\*\* 江戸川大学 人間心理学科教授 臨床心理学

表1 調査対象者の内訳

	1年	2年	3年	4年	計
男	99	81	19	6	205
女	203	100	21	11	335
計	302	181	40	17	540

表2 大学不適應および関連要因を測定するために用いた質問項目

<b>【授業理解の困難さ】</b> ( $\alpha = .78$ ) 大学の勉強についていけない感じだ 授業の内容が難しいと思う 大学の授業のレベルは高すぎると思う 大学での勉強方法(勉強のやり方)がわからない
<b>【入学目的の明確さ】</b> ( $\alpha = .72$ ) はっきりとした目的があって大学に入学した なんとなく大学に進学した(※) 将来の就職(または進学)のことを考えて、現在の大学・学科に入学した
<b>【大学への帰属意識(大学への愛着)】</b> ( $\alpha = .92$ ) ○○大学を気に入っている 自分にとって、○○大学は居心地がよくて、落ち着くことができる ○○大学は自分にとって大切な居場所である ○○大学が好きである 私は○○大学の雰囲気になじめていない(※) 私は、○○大学に愛着がある 私は○○大学に受け入れられていると思う ○○大学の学生であることを誇りに思う
<b>【大学不適應】</b> ( $\alpha = .74$ ) 大学生活が辛い(つらい)と感じることがある 大学をやめようかと思ったことがある まだ授業があるのに、意欲がわかなくて大学から早めに帰宅したいと思うことがある 授業がある日なのに大学を休みたくなることがある 大学を卒業できないかもしれないと思ったことがある (※は逆転項目)

## 方 法

### 調査協力者

首都圏の四年生大学の学生540名(男性205名, 女性335名, 平均年齢19.08歳, SD 1.17)を対象に2013年6月に質問紙調査を実施した。調査対象者の学年と性別の内訳は、表1に示した通りである。

### 手続き

調査に先立ち、回答は強制ではなく、評価を伴わず、個人情報の開示されないことを説明し同意を得たうえで、講義時間中に集合調査を実施した。

### 調査内容

中村・松田(2013)に基づき、大学生活における①授業理解の困難さ(「大学の勉強についていけない感じだ」など4項目)、②入学目的の明確さ(「はっきりとした目的があって大学に入学した」など3項目)、③大学への帰属意識(「私は○○大学に愛着がある」など8項目)、④大学不適應(「大学をやめようかと思ったことがある」など5項目)、⑤友人関係満足度(1項目)について、いずれも6件法で回答を求めた(表2)。ここでの「○○大学」とは、調査対象者が所属する大学である。

なお、③は、高木(2003)の「組織コミットメント尺度」、越(2007)の「所属集団に基づくアイデンティティの測定尺度」、本多・井上(2005)の「学級集団帰属意識尺度」、野寺・中村(2011)の「向大学態度尺度」を参考にして、中村・松田(2013)がこれらの一部を引用または大学への帰属意識を測定するのにふさわしい表現に改変し、新たな項目を加えて構成した25項目を因子分析した結果得られた第一因子(「大学への愛着」因子)の項目群である。

また、丹野(2008)の⑥改訂版友人関係機能尺度を5件法で尋ねた。同尺度は、「安心・気楽さ因子」(「○○さんと一緒にいると、何となく楽だ」など5項目)、「娛樂性因子」(「○○さんは、趣味や娛樂の仲間である」など5項目)、「関係継続展望因子」(「○○さんとは、年をとっても友人でいたい」など5項目)、「情緒的結びつき因子」(「○○さんとは、辛いときに励まし合う仲間である」など5項目)、「相談・自己開示因子」(「○○さんは、よい相談相手である」など5項目)、「支援性因子」(「○○さんは、ふだんから私を助けてくれる」など5項目)、「肯定・受容因子」(「○○さんは自分の存在を受け入れてくれる」など5項目)、「学習・自己向上因子」(「○○さんから、学ぶこ

表3 各変数の基本統計および性差

	総平均(SD)	男性(SD)	女性(SD)	t 値
友人関係の満足度	4.32(1.23)	4.24(1.29)	= 4.38(1.18)	-1.31
授業理解の困難さ	3.34(0.83)	3.28(0.84)	= 3.37(0.82)	-1.29
入学目的の曖昧さ	3.51(1.13)	3.45(1.19)	= 3.54(1.10)	-0.88
大学への愛着	3.65(0.92)	3.54(1.00)	< 3.73(0.85)	-2.32*
大学不適応	3.52(1.02)	3.44(1.08)	= 3.56(0.98)	-1.28
<b>友人関係機能尺度</b>				
安心・気楽さ	4.07(0.87)	3.78(1.01)	< 4.25(0.71)	-5.75***
娯楽性	3.86(0.86)	3.68(1.00)	< 3.98(0.73)	-3.73***
関係継続展望	3.66(0.95)	3.48(1.04)	< 3.78(0.87)	-3.43***
情緒的結びつき	3.41(0.95)	3.15(1.02)	< 3.57(0.87)	-4.90***
相談・自己開示	3.70(0.95)	3.47(1.03)	< 3.84(0.86)	-4.32***
支援性	3.84(0.93)	3.60(1.06)	< 4.00(0.80)	-4.63***
肯定・受容	3.89(0.85)	3.65(0.98)	< 4.04(0.72)	-4.97***
学習・自己向上	3.64(0.92)	3.47(1.04)	< 3.74(0.83)	-3.09**
人生の重要な意味	3.39(0.96)	3.26(1.07)	< 3.48(0.86)	-2.49*

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$

とが多い」など5項目),「人生の重要な意味因子」(「○○さんは、自分の人生を語る上で欠かせない存在である」など5項目)計9因子45項目から成る。なお、ここでの○○さんとは、同じ大学に通う最も親しい同性友人である。

結果の集計・分析にあたり、①～⑤は「まったくあてはまらない」を1点、「あてはまらない」を2点、「あまりあてはまらない」を3点、「ややあてはまる」を4点、「あてはまる」を5点、「よくあてはまる」を6点とした。⑥は「あてはまらない」を1点、「あまりあてはまらない」を2点、「どちらともいえない」を3点、「ややあてはまる」を4点、「あてはまる」を5点とした。

## 結 果

### 1. 基本統計と性差の分析

大学不適応とその関連要因および友人関係機能の下位尺度ごとに算出した  $a$  係数は .72 ~ .92 の値を示し、尺度の信頼性が概ね確認されたので、それぞれの尺度ごとに平均点を算出した。大学不適応とその関連要因に目立った性差はないが、対人的機能の全ての側面で男子学生よりも女子学生のほうが高くなっており、女子の友人関係における機能性の高さがうかがわれる(表3)。

### 2. 変数間の相関関係

表4に示した通り、大学不適応および各変数間の相関係数を算出した結果、大学不適応と大学への愛着、友人関係満足度、入学目的の明確さとの間に有意な負の相関がみられた。大学不適応と授業理解の困難さとの間には、有意な正の相関が認められた。また、大学への愛着と友人関係満足度、入学目的の明確さとの間に有意な正の相関がみられた。

### 3. 各要因が大学不適応に及ぼす影響

各変数が大学不適応に対してどのような影響を及ぼすのかを検討するために、大学不適応を基準変数とし、大学への愛着、友人関係満足度、入学目的の明確さ、授業理解の困難さを説明変数とする重回帰分析を行った(表5)。

その結果、授業理解の困難さ、大学への愛着か

表4 大学不適応と各変数の相関

	友人関係満足度	授業理解困難さ	入学目的の明確さ	大学への愛着
大学不適応	-.232***	.322***	-.218***	-.374***
友人関係満足度		.067	.163***	.486***
授業理解の困難さ			.025	.098*
入学目的の明確さ				.320***

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$

表5 「大学不適応」の重回帰分析(全体)

	説明変数				F	R <sup>2</sup>
	友人関係満足度	授業理解の困難さ	入学目的の明確さ	大学への愛着		
大学不適応	-.085*	.356***	-.118**	-.333***	51.121***	.284

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$  数値は標準偏回帰係数

表6 「大学不適応」の重回帰分析(男子学生)

	説明変数				F	R <sup>2</sup>
	友人関係満足度	授業理解の困難さ	入学目的の明確さ	大学への愛着		
大学不適応	-.104	.376***	-.217**	-.314***	19.746***	.325

\*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$  数値は標準偏回帰係数

表7 「大学不適応」の重回帰分析(女子学生)

	説明変数				F	R <sup>2</sup>
	友人関係満足度	授業理解の困難さ	入学目的の明確さ	大学への愛着		
大学不適応	-.057	.326***	-.025	-.438***	33.976***	.315

\*\*\* $p<.001$  数値は標準偏回帰係数

ら大学不適應への標準偏回帰係数は0.1%水準で有意であり、入学目的の明確さ(1%水準)、友人関係満足度(5%水準)も有意であった。これは、授業理解が困難であるほど、また、大学への愛着が乏しく入学目的が曖昧で友人関係に満足していないほど、大学不適應傾向が高いことを意味する。ただし、友人関係満足度は標準偏回帰係数の値が小さいので大学不適應に対する直接的な影響はそれほど大きくないと言える。

次に、同様の分析を男女別に行った。男子学生では、授業理解の困難さ、大学への愛着から大学不適應への標準偏回帰係数が0.1%水準で有意であり、入学目的の明確さ(1%水準)も有意であったが、友人関係満足度は有意でなかった。男子学生においては、授業理解が困難であり、大学への愛着に乏しく、入学目的が不明確であるほど、大学不適應傾向が高いが、友人関係満足度は直接的には大学不適應に影響しないと言える(表6)。

一方、女子学生では、大学への愛着、授業理解の困難さから大学不適應への標準偏回帰係数が0.1%水準で有意であったが、友人関係満足度および入学目的の明確さは有意でなかった。女子学生においては、授業理解が困難で大学への愛着に乏しいほど大学不適應傾向が高いが、友人関係満足度と入学目的の明確さは、直接的には大学不適應に影響しない(表7)。

#### 4. 各要因が大学不適應に及ぼす直接的影響と間接的影響

大学不適應に影響する各要因が大学への愛着(帰属意識)に影響し、愛着が大学不適應に影響するという一連の因果関係を検討するために、中村・松田(2013)と同様に探索的にパス解析を行った。最終的なモデルを図1に示す。適合度指標の値を見ると、データに適合した結果が得られたと言える。標準化係数および有意確率から、大学不適應に対して直接的で最も強く影響する要因は、授業理解の困難さおよび大学への愛着(負の影響)であった。また、入学目的の明確さも大学不適應に対して負の影響を与えることがうかがわれる。一方、友人関係の満足度は、大学不適應に対して直接的にはそれほど強い影響を及ぼさない

が、大学への愛着を媒介して間接的に大学不適應の低さに影響する傾向が認められた。

次に、一連の因果モデルにおける性差を検討するために、同様のパス解析を男女別に行った。男子学生の最終的なモデルを図2に示す。適合度指標を見ると、RMSEAの値がやや高いものの、概ねデータに適合したものであると言える。標準化係数および有意確率から、大学不適應に直接的かつ最も強く影響する要因は、授業理解の困難さであり、大学への愛着および入学目的の明確さも大学不適應に対して負の影響を与えている。一方、友人関係の満足度は、大学不適應に対して直接的には影響を及ぼさないが、大学への愛着を媒介して間接的に大学不適應の低さに影響する傾向が認められた。

また、女子学生の最終的なモデルを示したのが図3である。適合度指標の値は、データに適合した結果が得られたことを示している。標準化係数および有意確率を見ると、大学不適應に直接的かつ最も強く影響する要因は、大学への愛着(負の影響)である。次いで、授業理解の困難さも大学不適應に強く影響している。一方、友人関係の満足度および入学目的の明確さは、大学不適應に直接的には影響を及ぼさないが、いずれも大学への愛着を媒介して間接的に大学不適應の低さに影響する傾向が示された。

#### 5. 友人関係の諸機能が友人関係満足度に及ぼす影響

友人関係におけるどのような対人的機能がその満足度の高さに影響するのかを検討するために、友人関係満足度を基準変数とし、友人関係機能尺度の9因子を説明変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、「安心・気楽さ」から友人関係満足度への標準偏回帰係数は1%水準で有意であり、「支援性」「関係継続展望」も5%水準で有意であった(表8)。

次に、同様の分析を男女別に行った。男子学生では、「関係継続展望」から友人関係満足度への標準偏回帰係数が0.1%水準で有意であり、「学習自己向上」「安心・気楽さ」も5%水準で有意であった(表9)。女子学生では、「支援性」から友人関係満足度への標準偏回帰係数が0.1%水準で

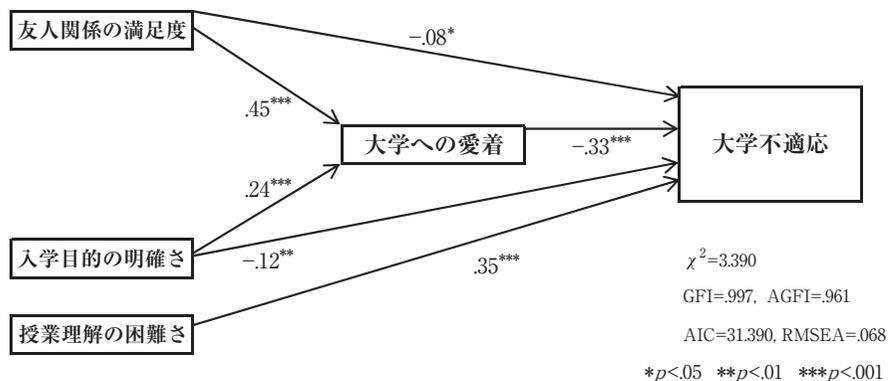


図1 大学不適応に影響する要因間のパス (全体)  
(数値は標準化係数を示す)

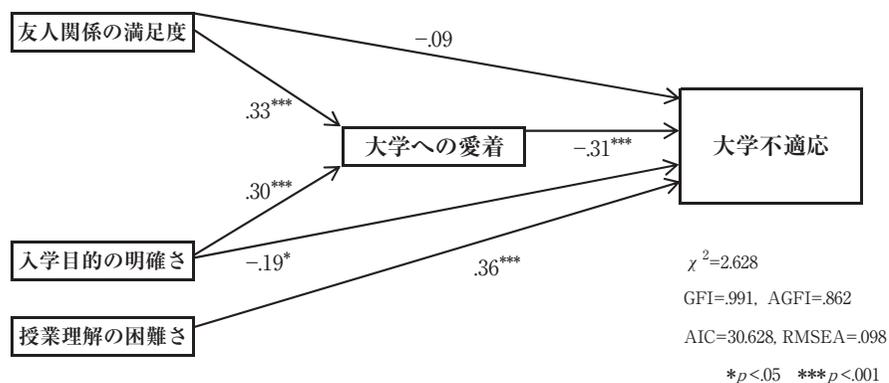


図2 大学不適応に影響する要因間のパス (男子学生)  
(数値は標準化係数を示す)

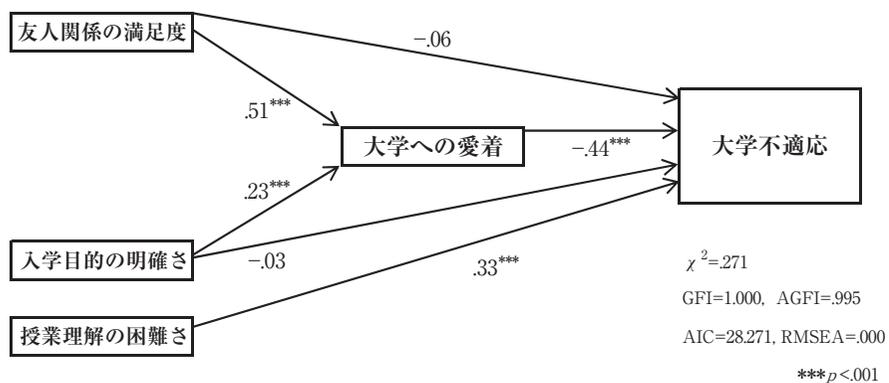


図3 大学不適応に影響する要因間のパス (女子学生)  
(数値は標準化係数を示す)

表8 「友人関係に対する満足度」の重回帰分析(全体)

	友人関係機能尺度			F	R <sup>2</sup>
	安心・気楽さ	支援性	関係継続展望		
友人関係満足度	.237**	.161*	.138*	45.295***	.245

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$  数値は標準偏回帰係数

表9 「友人関係に対する満足度」の重回帰分析(男子学生)

	友人関係機能尺度			F	R <sup>2</sup>
	関係継続展望	学習自己向上	安心・気楽さ		
友人関係満足度	.486***	-.267*	.251*	19.279***	.288

\* $p < .05$ , \*\*\* $p < .001$  数値は標準偏回帰係数

表10 「友人関係に対する満足度」の重回帰分析(女子学生)

	友人関係機能尺度			F	R <sup>2</sup>
	支援性	安心・気楽さ	肯定・受容		
友人関係満足度	.438***	.289**	-.188*	36.843***	.290

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$  数値は標準偏回帰係数

有意であり、「安心・気楽さ」(1%水準)および「肯定・受容」(5%水準)も有意であった(表10)。

これらの結果は、相手と深くかかわり合うことや互いを高め合うような関係よりも、一緒にいると安心して適度に気が合い、長期にわたる友好関係の継続が期待できて(男子学生)、困った時には助け合える(女子学生)ような関係にある友人の存在が大学生の友人関係満足度を高めることを示唆する。

## 考 察

男女を合わせた分析を行った結果、大学不適應に直接的に影響することが明らかになった要因は、授業理解の困難さ、大学への愛着、入学目的の明確さ、友人関係満足度であった。つまり、授業理解が困難であるほど、そして、大学への愛着が乏しく、入学目的が曖昧で友人関係に満足していないほど、大学不適應傾向が高いと言える。これは、一連の先行研究(松井・中村・田中, 2010; 中村・松井・田中, 2011; 中村・松田, 2013)と概ね同様の結果であり、授業理解の困難さ、入学目的の明確さ、友人関係満足度は、大学不適應を抑止し、学校適應を促すための方策を検討するうえで欠かすことのできない要素であることがあ

らためて示された。

また、中村・松田(2013)と同じく、大学への愛着(帰属意識)は、大学不適應に直接的な負の影響を与える要因であると同時に、友人関係満足度と大学不適應の間であって不適應に対して抑制的な影響を及ぼす媒介要因であることも追認された。換言すると、友人関係満足度は、大学への愛着を媒介して大学不適應に負の影響を与える間接的要因であると言える。さらに、本稿における男女別の分析によって、女子学生においては、入学目的の明確さも、大学への愛着を媒介して間接的に大学不適應の低さに影響する要因であることが示された。いずれにしても、大学への帰属意識は大学生の大学適應を促す強力な要因であり、その影響は男女に共通して見られるが、女子学生において、より顕著であることがうかがわれる。

上述の通り、友人関係満足度は大学への愛着を媒介して大学不適應に負の影響を与える要因であることが示されたが、どのような対人的機能がその満足度を高めるのかを分析した結果、男女に共通して、深いかかわりや互いを高め合う関係よりも、安心して気楽につきあえる相手を求めていることが示された。そして、男子学生においては長期にわたる友好関係の継続が期待できること、女子においては困ったときに助け合える関係にあることが友人関係の満足度を高めている可能性が示唆された。

これらの結果は、大学不適應を予防するための方策として、①授業理解を促すような学生への働きかけが最も重要であること、②友人関係を築きにくい学生に対して、安心して一緒に過ごすことができ(男女共通)、長期的な友好関係が期待でき(男子学生)、困った時にはお互いに助け合える(女子学生)ような友人関係を構築するための環境支援が求められること、③入学目的の明確化を推進するための広報活動や入試方法の改善、ならびに、入学後も目的や目標を維持できるような学業面および進路面での支援体制、などが必要であると考えられる。

今後の課題としては、本稿を含む一連の研究結果が大学不適應の指標として、いわゆる「主観的

な不適應感」を用いて測定した結果に基づくものであることから、今後は、出席率や成績評価などの客観的指標を用いて大学不適應の問題を継続検討することにより、研究知見の妥当性および一般化可能性を検証する必要があると言える。

また、大学への愛着は、大学不適應に直接的な負の影響を与える要因であると同時に、友人関係満足度や入学目的の明確さと大学不適應との間にあって不適應に対して抑制的な影響を及ぼす媒介要因であることが示されたが、今後は、大学への帰属意識を構成する他の因子が大学不適應にどのような影響を及ぼすのかについても検討する必要があると考える。

#### 参考文献

- 本多公子・井上祥治 2005 高等学校における学級集団帰属意識尺度作成の試み 岡山大学教育実践総合センター紀要 第5巻 109-117.
- 越 良子 2007 中学生の所属集団に基づくアイデンティティに及ぼす集団内評価の影響 上越教育大学研究紀要 第26巻 357-365.
- 松井 洋・中村 真・田中 裕 2010 大学生の大学適應に関する研究 川村学園女子大学研究紀要 第21巻 第1号 121-133.
- 中村 真・松井 洋・田中 裕 2011 大学生の大学適應に関する研究Ⅱ -入学目的, 授業理解, 友人関係でみた対象者のタイプと大学不適應との関連- 川村学園女子大学研究紀要 第22巻第1号 85-94.
- 中村 真・松田英子 2013 大学生の学校適應に影響する要因の検討 -大学不適應, 大学満足, 就学意欲に着目して- 江戸川大学紀要 第23号 151-160.
- 野寺 綾・中村信次 2011 向大学態度尺度開發の試み 日本福祉大学子ども発達学論集 第3号 71-80.
- 高木浩人 2003 多次元概念としての組織コミットメント -先行要因, 結果の検討- 社会心理学研究 第18巻第3号 156-171.
- 高木浩人 2006 大学生の組織帰属意識と充実感の関係 愛知学院大学心身科学部紀要第2号増刊号 61-67.
- 丹野宏昭 2008 大学生の内的適應に果たす友人関係機能 青年心理学研究 ,20,55-69.